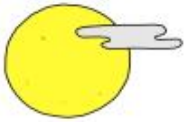
入来行事考
十五夜（陰暦八月十五日）

中山　とし子



（一）

ああ、はればれとした縁側だ
満月が煌煌と輝いて
まるで真夏の昼間のようだ
庭に影差す　柿の枝々　繊細に
鶏さえ　裏山で餌をついばみそうだ

バラ(注一)の上には　しきたり通り
すすきと萩の　寸胴の花入れ
白々とさえわたり
高杯に　月見だんご　と　ぼたもち

一升枡には　芋　栗　柿　にトウモロコシ
なぜか　キャラメル　チョコレート
バナナさえ！

ああ、　ふくふくとした　縁側だ

怪しげな一団　頭を揃えて
道端で円陣を組む　山賊らしい

「今年の月は　ことのほか大きいから
いいか　みんな　用心しろ」

親分のヤスちゃんから小声のゲキが飛ぶ
子分の七～八人　無言で肯く
手にはビニールの袋

「月はまだ　愛宕山の東だから　焦らな
くてもいいが」

「お供え盗みは　素早く　気付かれぬよう」

まずは　狙う家々の順番と計画を練る
二手に分かれて　村の前からと後ろから
同時に襲う
最後に集まるのは　村の中心三本杉の前
山賊　風のように散らばる

ぬき足　さし足　決して家人に
気付かれぬよう　縁側の下に忍んで
そっと　手だけバラの中へ　差し入れる

心臓は ドッキン ドッキン
焦って　足は　ヘナヘナ
気の弱い奴は　木戸口で
こっそり伺うのみ
そんな奴には　バナナはやらない！
首尾よくいったら

「そら！　走れ！」

時には　白い道にながーく伸びている
ゴムのような　黒いヤツ
知らずに踏んで　お互いに仰天
つい口に出る　ゴメンナサイ！

三本杉の前に集まったら　獲物の分配
キャラメルが　見当たらないね
ちゃっかりだれかの　腹の中か？

ああ、はればれとした　縁側だ
月も　煌煌と照っている
今しも　大空のてっぺんに
ああ、ふくふくとした　満月だ

（注一）バラ・・・直径一メートルくらいの竹で編んだ平たいザル

（二）

三々五々　大人達も集まる
村の小さな メインストリート

お供え　食べつつ　月を見る
月を見ながら　怪談話
名人のおばあさんの周りに
子供達群がる

おばあさんの火の玉の話は
何度聞いても怖い

「これは　ほんとの話」

と　必ず最後に　おばあさんは言う

そろそろ　大綱が来る
十五夜のクライマックス　綱引きは
大人と子供衆（こどんしゅ）に分かれて　総勢二十人
くらいの　小さな綱引き
このときばかりは　大人をやっつける
好機！と　子供たちの張り切りよう

大人も決して手加減せず　子供に媚びは
売らない！

「子供（こどん）な何人？
一、二人抜けもそかい・・・ナ」

用事ありげに　そっと抜けて　応援団に
まわるおじさん
子供達は　気付かないふり
そして　なぜか　いつも勝つ　子供衆（こどんしゅ）
だから楽しい　十五夜綱引き

十五夜の行事は、子供時代の何より楽しい思い出と言っても良い。この行事が行われていたのは、戸数九軒の「小萩の下」と呼ばれていたとても小さな村の一界隈でのことである。小萩とは「小萩さん」という産婆（助産師）さんのお家で、その小萩さんのお家の東の方角に位置する家々を「小萩の下」と呼んだ。この界隈の子供たちは、ほぼ全員小萩のおばさんによって取り上げられている。小萩より東の方角だから、「上」のほうが良かろうと思うが、温泉場からは遠い方向になるので、こう呼んだのかもしれない。特別の地域であったわけではなく、ただ、子供が多かった。村人からは揶揄を込めて「小萩の下の子供達」と呼ばれていた。子供が多いと、何かと賑やかだから目立つ。子育て世代の親達も、活発に行動する機会が多い。鹿児島は郷土教育が盛んだったが、その名残が残っていて、私達はいつも徒党を組んで遊んだ。しっかりした年かさのリーダーがおり、上は下の面倒を見るのが当然で、下は上の言う事を聞かなければならなかった。「席」と言う言葉を使い、目上には「あんたは、わたしより席が上だから・・・」という言い方をした。戦後生まれの私達の頃は「子供会」があって、これは小学生としての義務で今とさほど変わらない活動があったが、それとは別に「子供衆」と呼ばれた自然発生的な子供の一団があった。「子供衆」は田んぼを駆け回ることができればその資格があったように思う。四才でも五才でも。

十五夜が楽しかったのは、一に、盗みの真似事が許されていた、というところにあるだろう。魅惑の夜に、普段は絶対できないことを、そういう行事だから堂々とやれたのであ

る。しかし家人に気付かれないよう、ほんとの泥棒のようにやらなければならないから、結構、頭も体力も使った。円陣を組んで組分けし、計画を立て、見張りを付けたり、物陰に隠れたり、本気でやるのだから皆必死だ。それだからこそ、たまらなく楽しかった。最後にはどの組が一番獲物が多いか、上等を盗んできたかを競うので、誰と組になるかは大問題だった。足の遅い子、恐がりの子、気の合わない子といろいろだ。しかし、「この子とは嫌だ。」と大っぴらに主張するわけにもいかない。何しろ、毎日のように一緒に行動する兄弟のようなものだし、何かの時には又こちらが助けてもらわなければならない・・・とか、親同士の力関係も、子供とはいえ、微妙に頭の中で配慮した。人間にはいけないことをやってみたいという気持ちが誰にでも潜んでいる。それをここで発散できた。子供達は各家のお供え物を値踏みもする。大人は子供社会でけなされないよう、ぼたもちの味をひそかに競ったり、子供の好きそうなものを供えたりと、気を使う。子供達に見捨てられたらいかに一種の遊びといえども、やっぱり淋しいものらしい。どっちも神経戦だ。

又、バナナは高級品で、めったに食べられるものではなかったから、バナナを供えてあるのを盗むのは楽しかった。その家は毎年決まっていた。

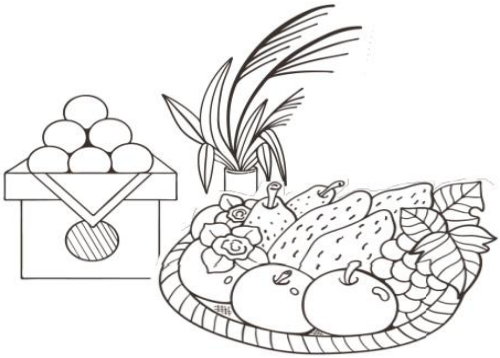
このころは蛇がよくいた。一日に何匹も見る。土の道を横切るように伸びているのを夜のこととてうっかり踏んだ時の感触は今だに足の裏にある。想像するより硬かった。蛇はにぶいのか、急に鎌首を持ち上げることはなく、悠然と長い体を引きずって藪に消えていった。

十五夜の楽しみその二は、綱引きと相撲である。相撲は消滅が早かった。というのも、男女混合の「子供衆」なので、いくら普段いばっていても女の子は力で負けることが多く、釣り合いがとれなくて消滅した。というのも、その頃の一家の子供の数は平均三人で、混合相撲にせざるを得ない事情もあった。もっと古い時代、一家に八人も九人も子供がいた頃はもっと繁盛していて、混合相撲にしなくても良かったのかもしれない。というより、女の子も相撲をしたのかどうか・・・。

綱引きは、大人が参加する時点までは、大人対子供であったから、皆張り切った。そのうち大人は「飲み方」（晩酌など、焼酎を飲むこと）に忙しく、子供だけになると、男対女だったり、随分工夫もしたが、何しろ人数が限られているので、成長してだんだん参加が悪くなる、良いリーダーがいなくなる、そんな形で次第に消滅していったようだ。

今考えると子供の自治組織「子供衆」は、すばらしかったと思う。親たちは「子供衆」を信頼していて、下手な口出しはしなかった。そんな暇もなかったのだろうが。子供のことに口出しをすれば、大人からも子供からも軽蔑される、そんな雰囲気があった。何より、子供達は自律的で、大人を真似て「結い」までした。どこの家も子供は働き手の一人だったから、夕方になると夕食のしたく、家の中、庭の掃除、風呂わかしなど、家事を義務として持っていた。そこで、チームで一件々各家の家事を片づけていく。人数が多いと片づくのも速い。田植えや稲刈りの時、大人が家単位で「結い」をして農事を済ませるのと同じだ。子供たちは、どこの家の中も納戸の中まで知っていた。なぜなら、家の中でかくれんぼをしたりしたから。なんと良き時代であっ

たろう。私の年代の人々は誰もが似たような子供時代を過ごしていたと思うが、人として鍛えられた、幸せな子供時代であったと思う。勿論、不自由なことは多かったが、不自由であればあるだけ、いつか、いつか、と将来への希望の芽を育てるエネルギーも湧いてきたし、だからこそ、行儀良く仲良く暮らす知恵も持てた。そんな目に見えないものを大切にして生きた時代がいとおしく、敬意の念と共に想う。

（注二）結い：［イ］と発音した。共同体の農事や屋根譜きなどを共同で行う、仕事の共同、分担化した形。対等に労働力を交換する。奈良時代から見られる。『角川国語中辞典』

（元日本語教師・エッセイスト）